

ロマン派詩人の語彙量——推計学的文体論

大橋 寿美子

ある作家の文体、またはある時代の言葉の基礎をなすのは素材としての語彙である。その語彙をここでは量の面からとりあげるのだが、もとより、量は質と無関係のものではない。それを敢えて語彙量に問題を限ったのは、ブリュノーをはじめ種々のフランス語史や作家研究によって、ある作家や時代の語彙の内容についてはすでにかなり豊富な資料が提出されており、それに反して、その語彙量に關してはあまりふれられていないからである。それは客観的に比較対照しうる形に語彙量を求めることの技術的困難にもよるのである。漠然と多い、少ないと言われている語彙量をより明確な形で述べることはできないものか？それを明らかにすることは、ある作家、あるいは時代の文体の基礎を明らかにするために必要であると考ええる。

一般に、文明が進み、人間生活が複雑多様になるに従って語彙量が増大するのは当然である。個人の例をとれば、子供よりも大人が、また、山野に住む人より都会に住む人の方が必然的により豊かな語彙を持つ。これはある一つの国語全体についても同様であり、

フランス語の場合も、中世から現代にいたるまでその語彙は自然増加の途を辿っていると考えてよからう。だが、その自然な過程の中で意識的に語彙を増加、または制限しようとした時期がある。十六世紀のブレイヤード派による増加運動、十七世紀のマレルブラによる言語純化主義の制限、そして十九世紀の初頭のユゴーらによるロマン派革命の語彙解放の時期などである。十六世紀の運動に關しては、少々調べたこともあるので、今度はロマン派革命における語彙解放の主張と、その結果としてあらわれた語彙量の大きさの実体を調べたい。

ロマン主義運動は、もとより、文学様式からその表現法、主題の選択など、多方面にわたるものであるが、詩における語彙の解放もその重要な主張の一つであった。何故そのような主張がなされなければならなかったのか？それを知るには、それ以前の詩がいかに特殊なものであったかをみなければならぬ。ブリュノーの「フランス語史」第十二卷（『ブリュノー執筆』）によれば、ロマン派より前の詩を特徴づけるのは、それが少数のいわゆる詩的な語を含んで

いることよりむしろ、それが用いることのできない語の多さであると言う。そこでは、俗語、卑語の禁止はもちろんのこと、婉曲迂言法愛好のあまり、事物をその本来の名称で呼ぶことまで避けるにいたり、「フランス語辞典の大部分の語を上品に避ける」⁽³⁾のが詩人の仕事となる。こういう擬古典主義詩作の宝典として、詩に用いてよい語、いけない語を明記してあるカルパンティエの「詩語辞典」⁽³⁾が出版されたのが一八二二年、さらにその第二版が一八二五年に出されているというから、この頃までは、詩に厳しい語彙制限をおこなうのが一般的であったと考えてよからう。

この不合理で不自然な語彙制限こそ詩を枯渇させる原因の一つであったし、また、ロマン主義運動が打破らねばならない大きい障害の一つであった。ではロマン派の詩人たちはそれぞれ詩の語彙の問題に関してどのような態度をとったのか？まず年代的にはラマルティヌがロマン派の筆頭にあげられるが、彼は言葉に関してはかなり古典的であった。それは彼の「瞑想詩集」が出版されたのがまだ一八二〇年という時点で、例のカルパンティエの「詩語辞典」出版より前でさえあることから当然と思われる。彼の詩はその抒情のみずみずしさにおいてロマン派派であるし、その表現の自然さにおいても、結果的には古典主義に背く点があったにせよ、彼自身の主張としては、言葉のロマン派には反対なのである。「表現は古典主義で、思想はロマン主義で」、あるいは「ラシニヌによって書かれたシェクスピアでなければならぬ」⁽⁴⁾というのが彼の考えであった。つぎにヴィニエに関しては、ユゴーより五十年長の彼は、ロマン派初期においてはグループでかなり力を持っていたらしい。しかし

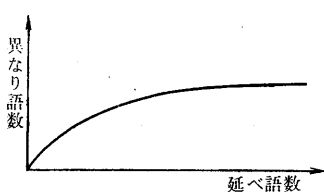
その主な関心は外部の表現様式より、むしろ、内容の哲学的思考の方に注がれ、しかも間もなくロマン派運動からも遠ざかって象牙の塔にこもる状態になったので、ロマン派の語彙拡張運動に積極的な役割を果たしたとは考えにくい。やはり、もっとも意識的かつ体系的な語彙拡張革命はヴィクトル・ユゴーを待たねばならない。

一八三〇年の「クロムエル序文」はロマン派勝利の金字塔とされているが、後にユゴーは「告発状への返答」という「静観詩集」におさめられた詩の中で、ロマン派運動を政治上の大革命と平行するものとして次のように書いている。「語は生れの良し悪しによってカストに閉じこめられて棲息していた。ある上品な語どもは、フェイドル、ジョカスタ、メロベたちと交際し、礼儀を掟とし、ヴェルサイユ宮で王侯の馬車に乗っていた。他の語どもは乞食の群、絞首台行きのやくざ者で、方言の中に住みつき、あるものは囚人船の隠語に住み、あらゆる低俗なジャンルに仕え、市場でポロに引裂かれ、靴下もかつらもなく、散文と道化芝居のために作られたもので(……)、下劣者、無法者、やくざであり、彼等の主人ヴォージジュラが、徒刑囚の監獄で囚人に烙印を押すように、その語彙集の中で日常語という烙印を押したのであった(……)。私は古い辞書に赤い帽子をかぶせてやった。もはや貴族語も庶民語もない(……)。私はダントンであり、ロベスピエールである。私は長剣をおびた貴族語に、その召使である平民言葉を降起させた(……)。さらに、私は平民語を縛りつけている鉄の首輪を打破り、地獄から古い地獄おちの陰惨な一団を引き出した。」この詩は実際は一八五四年に書かれたのだが、詩集中の日付は一八三四年となっている。つまり、

三〇年の「クロムエル序文」と一連の激しいロマン派の戦いの中に位置づけられるものとして、ユゴーは日付をくりあげたのである。こうしてユゴーは意識的な語彙拡大を主張し、詩作に実行する。そしてバルビエはその回想録でユゴーを「ロンサルとシャットーブリアンの息子」であり、「フランス文学がかつて持った最大の語の攪乱者」と呼ぶことになる。以上のように、ラマルティース、ヴィニエ、ユゴーの間にも言葉に関して主張の差はあるが、結果的に歴史の大きい流れからみれば、ロマン派以降の近代詩の語彙がそれまでよりはるかに豊かになったのは事実である。とすれば、具体的にどのくらい豊かになったのか？そしてこれらロマン派詩人たちの間にもどのくらい差違があるのか？

さて、ある作家の語彙量と他の作家のそれとを客観的に比較しようのような形にして表すのは容易ではない。幼児の語彙と成人のそれのどちらが大きいかは常識的に容易にわかることであるし、同じようにラブレールやユゴーの語彙がラシーヌのそれよりはるかに大きいことも作品を読めばすぐ理解できる。しかし、具体的に一方が他方よりどのくらい多いか、あるいは少いかとなると、はっきりした客観的数値はつかみにくく、その比較は困難になる。比較のための具体的な方法として、まず、いくつかの作品中の用語全体をそれぞれ調べあげることができる。しかし、もとのテキストの長さが相異れば、その用語数の多少によって、それぞれの作家の語彙の多少を比較することはできない。なぜなら、テキストの長さが二倍になれば延べ語数は二倍になるが、そこに含まれる異なり語数は決して二倍

にならないからである。つまり、テキストが長くなればなるほど異なり語数もふえていくのは当然であるが、すでに用いられた語の反復使用が多くなり、新しい語があらわれる率が小さくなって、単純な比率計算ができないからである。これを図であらわすと上のよう



な曲線をえがく。

では、テキストを同じ長さに限って、その中に用いられている異なり語数をそれぞれ数えてはどうか？この方法による比較はかなり有効であるが、それでも短いテキストの全部と長いテキストの一部とでは語の密度が異なるはずだから、これらを全く同列において比較するには問題がある。もともと同じ長さ、同じジャンル、同じようなテーマを扱ったテキストであれば比較しやすいが、実際にはそれほど似かよったテキストを集めるのは難かしいから、実用的な比較はしにくい。

さて、いろいろの語彙統計論がある中で、ギローは次のような推計法を提案している。彼はレクシック *Lexique L* という観念を提出し、その *L* の多少で作家の語彙の多少を比較しようと考えてるのである。*L* とは、あるテキストの中で実際に使われている語彙 *vocabulary* ではなく、作家がいつでも実際に自由に使いうるものとして頭の中に貯えているものであり、潜在的な使用可能語彙とでもいうような性質のものである。換言すれば、もしその作家がどこまでも書き続け、頭の中にある彼の語彙を全て使いつくし、これ以上新らし

い語が出ないところまで書いたら、その中の異り語数は、どれだけになるかということであり、先のグラフで言えば、この曲線をどこまでものばしていったらやがて水平になるであらうが、その水平の高さはどれかという値である。語彙の小さい作家は早く低い水平に達するであらうし、大きい作家は長く上昇を続けた後、高い水平に達するであらう。その究極の水平値を、実際のあるテキストの語彙から推計できる公式を確立するのがギローの「語彙統計論」の中心テーマの一つであり、彼は経験的に近似式を探りつつ、次の公式を提出している。

$$L = N \left(\frac{2V_1}{V} \right)^{\frac{1}{2}}, \quad \left(\frac{V_1 V_2}{V} \right)^{\frac{1}{2}} = \frac{N_1}{N}$$

ただし、このLは求めるべき推計語彙量、Nはテキストの長さ、つまりテキスト中の延べ語数、Vはその中での異なり語数、V₁はその中で一回のみ使用された語の数であり、N₁、V₁、V₂はそれぞれ同テキストの一部分についての同じものの数値を示す。つまり、同テキストから二つの相異なる長さについての資料を集め、それによって指数αを算出した後、究極のL、すなわち、その作家の使用可能語彙総量を求めることができ、そのLの大小によって、作家たちの語彙の大小を論ずることができる、とギローは考えるのである。

しかし、このLの求め方、その解釈について問題がないわけではない。この公式が経験的近似式であって理論的裏付けが充分なされていないことには不安がある。ギローの他にもツイブフ、マंडデルブロなどそれぞれの統計法を考えているし、日本語についての水谷

静夫の公式もより理論的基礎を持っている。しかし、ここで敢えてギローの方法を用いたいのは、電子計算機による綿密な資料集めが一般的には容易でない現在、ギローの公式では比較的簡単な資料をもとにして推計ができること、さらに、数人の作家についてすでに同じ基準で語彙量推計がなされていて比較に好都合であること、この二つの理由による。

ここでは、同じジャンルでなるべく似た性質のものとして、ラマルティエヌの「閑想詩集」、ヴィニエの「運命」、ユゴーの「静観詩集」の三篇をとりあげてみる。公式にあてはめるには、同テキストの二種の良さについて、それぞれの延べ語数、異なり語数、そのうち一度のみ用いられた異なり語数を調べねばならない。しかし、具体的な手順としては、テキスト中のあらゆる語を数える代りに、Aではじまる語のみとりだすことができる。その作家が特にAではじまる語を好んだとか、Aではじまる語がアルファベットの他の字ではじまる語に比べて特殊なものであり、外来語が多い、とでもいうようなことがない限り、Aのみを選ぶことによって全体の推量に偏りができることはないはずである。Aではじまる語数に13.5%を掛けるとほぼ全体の語数が出るといえるが、計算には変りがない。なお、テキストの長さについては、詩集全体の代りに部分をもって推計できる。だが、なるべく偏りのない平均的数値をとるために、詩集全体にわたって、十行おき、あるいは二十行おきにいくつかのグループにまとも、それらをさまざまに組合わせた上、その平均値をとった。ラマルティエヌについての資料を計算例をあげるが、数値に端数があるのは平均値をとったためである。

Lamartine

		N	V	V'
(1)	—	3,000	66.3	41.0
(2)	—	6,000	98.3	52.0
(3)	—	9,000	120.5	58.0
(4)	—	12,000	138.0	64.0

● (1)と(2)を用いた計算例。

$$\begin{cases} N'=3,000 & N=6,000 \\ V'=66.3 & V=98.3 \\ V_1'=41 & V_1=52 \end{cases}$$

$$\text{公式 } \left(\frac{V_1 V'}{V V_1'} \right)^a = \frac{N'}{N}$$

$$\begin{aligned} \therefore a &= \frac{\log N' - \log N}{(\log V_1 + \log V') - (\log V + \log V_1')} \\ &= \frac{\log 3,000 - \log 6,000}{(\log 52 + \log 66.3) - (\log 98.3 + \log 41)} = 4.363 \dots \end{aligned}$$

$$\text{公式 } L = N \left(\frac{2V_1}{V} \right)^a$$

$$\begin{aligned} \therefore \log L &= \log N + a(\log 2V_1 - \log V) \\ &= \log 6,000 + 4.36(\log 104 - \log 98.3) = 3.883 \end{aligned}$$

$$\therefore L \approx 7640$$

● 同じように(1)と(3)を組み合わせると、

$$L \approx 7,590$$

● (2)と(3)とでは、

$$L \approx 7,610$$

● (2)と(4)とでは、

$$L \approx 7,750$$

という数値ができる。ここから、Lすなわちラマルティヌの推計語彙量はほぼ七七〇〇語前後であろうと考えることができる。同様にしてヴィニエを調べるとずっと多く一八〇〇〇語、ユゴーがそれよりやや少くて一四〇〇〇語という推計語彙量が出る。⁽⁶⁾

さて、ここに算出された語彙量をどのように評価できようか？それらははたして大きいのか、それともさほどでもないのか？ロマン派詩人たちの語彙の大小は、他の時代の作家たちのそれと比較して相対的に論じられねばならない。幸いギローがここでおこなったのと同じ方法で数人について算出した数値がある。それに、以前私の調べたロンサルとマロの資料を加えて、時代別に整理してみると次頁の表の通りである。

これらの数値と比較してみると、ロマン派詩人たちの語彙は、一般に漠然とそう信じられているほど異常に大きいわけではないことがわかる。象徴派以降の詩人たちは、ヴァレリーを除いて皆、ロマン派以上の語彙量を持っている。もっともこれは象徴派が年代的にロマン派より後に位置し、ロマン派による語彙革命の基礎に立って

Lamartine : Méditations poétiques	7700
Vigny : Les destinées.....	18000
V. Hugo : Les contemplations.....	14000
La chanson de Roland	4000
Aucassin et Nicolette	4000
Ronsard : { Les Odes	22000
{ Les amours.....	20000
Marot : { Chansons	6000
{ Elégie.....	7500
Rabelais.....	100000
Corneille }.....	4-5000
Racine }	
La Fontaine	20000
Molière : Les femmes savantes.....	21000
V. Hugo : La légende des siècles	60000
Baudelaire : Les fleurs du mal	25500
Rimbaud : Les illuminations	42000
Mallarmé : Poésies.....	31000
Apollinaire : Alcools	33000
Valéry : { Poésies	14000
{ Prose	26000
Claudél : Les cinq grandes odes.....	50000

いることから当然かもしれない。一方、十六世紀にさかのぼってみると、例外的に豊富な語彙を持つラブレールはもとより、ロンサルもロマン派以上の数値を示し、十七世紀の言語純化運動下においてさえ、モリエールや・フォンテーヌの語彙はこれら三詩集の数値以下ではなかった。要するに、ここに検討した三詩集に関する限り、それらはロマン派の非常な語彙拡大を示してはいないのがある。

ではロマン派革命はその華々しい語彙解放宣言の実体を伴なわなかったのかというところは言えない。ジャンルが異なるので同列の比較はしにくいにせよ、十七世紀の大作家たち、コルネイユやラ

シーヌの極度に切りつめられた語彙に比べると、ロマン派の語彙膨脹は明らかである。ロマン派演劇を資料にとればその比較はよりはつきりしよう。また、同じロマン派の中でも、ラマルティーンとユゴーはそれぞれ「瞑想詩集」、「静観詩集」という相似た性質の詩集を出しながら、表現の古典主義を唱えた前者と革命を唱えた後者とは、その語彙量が七七〇〇と一四〇〇〇と大きい開きをみせていることも単なる偶然ではあるまい。さらにより重要なのは、ここできとりあげた三詩集だけではロマン派としての語彙量の全輪郭をとらえていないということである。特にユゴーでは「静観詩集」で一四〇〇〇語、同じユゴーの「諸世紀の伝説」についてはギローは六〇〇〇〇語という計算をしているのであるから。つまり当然のことながら、語彙解放主義のロマン派詩人として、必ずしも語彙密度の高い詩を書いたわけではないのだ。だから、ある一つの詩集から推計される語彙は、量としては古典派の量とあまり変らないかもしれない。違うのは、ロマン派詩人はいつもその同じ枠にとどまっていない、ということである。詩の内容によって必要があれば六〇〇〇〇〇という高い数値にまで語彙を上げうるということ、これが古い詩語制限の枠を破ったロマン派語彙解放の成果と考えねばならない。

最後に指摘しておきたいのは、ギローの公式Lの解釈である。彼はLを、ある作家が使用できるものとして頭の中に貯えている語彙の総量、と規定しているのだが、それを算出するにあたって、彼は一作品のみを資料にとり、それをそのまま作家の語彙としているように思われる。そのためには、その作家が常にここで資料に用いた作品と同じ調子で書きつづけていることを前提としなければならな

いが、実際にはそういう場合は稀である。ユゴーのように、作品によってLが一四〇〇〇、あるいは六〇〇〇〇と出るのは、Lを作家の使用可能語彙総量とは解釈できない。作家自身の語彙総量を求めるには全作品にわたって資料を集めねばならぬであらう。全作品が同じジャンルで相似た性質のものであるなら、一作品をもって全体を推計することもできるが、多方面にわたる作品がある場合は、一作品によって作家自身の語彙を論ずるのは全く不可能である。故に、この公式によって導かれるLとは、資料に扱った作品の語彙密度指数とでもいふべきものであって、その限りにおいて比較も可能であり、価値を持つものと考ええる。

註

- (1) 「ロンサールの語彙について」—40年12月、仏文学会関西支部にて口頭発表。ロンサールの語彙は、なるほど十七世紀の言語純化運動下にある大作家たちのそれよりやや大きい、十九世紀以降の近代詩人たちの語彙よりはずっと小さく、今日の目から見れば、決して標準以上に並はずれて豊かな語彙を駆使したのではない、という結論。

- (2) F. Brunot: Histoire de la langue française, t XII, p. 49 (par Ch. Bruneau)
- (3) L. J. M. Carpentier : Dictionnaire de la langue poétique. (Paris, 1822, 1825)
- (4) Correspondances. t I, p. 319
- (5) P. Guiraud: Les caractères statistiques du vocabulaire.

(P. U. F. 1954)

- (6) ラマルティヌとヴィニールでは二二〇〇〇語までのテキストを作ったが、それはそれぞれの詩集全体の六割と八割にあたる。この二人についてはこの資料で比較的安定したLを出すことができた。一方、ユゴーについては、もとの詩集が長いので二二〇〇〇語までのテキストをとったが、それでも全体の二割強にすぎない。そして前の二人に比べてユゴーの場合はLの安定度がよくない。これはユゴーの語の使い方にかなりむらがあり、二割程度の例ではまだ安定した平均値がとれなかったものと思う。この点、信頼できる推計値を出すために何割くらい例をとるべきか、さらに、算出された推計値の誤差の限界はどうなのか、それがはっきりしていないのは、ギローの方法に問題のあるところである。